

草が切れた時などに使ひに頼む等は一寸便利です、小供の方は先づこの位にして、不慮の出来事二三を述べませう、或時海岸で崖下の波打際にて無心に寫生をして居つたら、上方から藁屑を浴びせかけられた、實に驚きました繪具から頭からこみだらけ、畫架は倒れる、畫板は二三間向ふの方へ飛んで行く、實に一箇のポンチ繪でした、しかし投じた人も下に人が居らぬと思ふて投じたので、怒る譯にはゆきませんから泣寝入りになりました。或る時は水彩寫生の道具を肩にかけて出掛けし處途中犬に吠えられて困りました、鎗の様な手製の傘杖や、

四尺位の畫架を袋入にして肩にかけては随分異様に見えたるならん、兎に角寫生中に起る出来事は無邪氣なる一種滑稽的事柄多く、用意周到ならざる爲めに、途中で雨に遇ひ、衣服を濡らし、宿屋につきたる如き、友人の家を訪ふて日が暮れ、途を失して川に、落ち衣服を濡らし、鉛筆を忘れて寫生に出掛け、現場で氣が付きし事等の珍談もあれど此位に略して置ませう。風景畫をかく人は寒暑の季節に遇て撓まず、

一切のことを忘れつゝ無心になつて筆取らねばならぬ、一面より見れば苦多くして樂少き業なれど筆取る人の心の中の氣樂さ、長閑さは、春の朝花園に飛ぶ蝴蝶の如く、友呼びかはず小鳥のその如く無邪氣なる小供に包圍せらるゝ時は、磯際近く打ち寄する白波の岸を洗ふにも比すべきか、鐵脚を床几にもたせつゝ自然界の妙景にあこがるゝ身は豈に無限の幸ならずや

手製の傘臺と三脚床几

熊本 M 生

端に節の存するやうすべきである、而してこれを中央にて二ツに切り、それに堅く外接する太きの竹四寸許を取り下部の上端に半長を固定し半長を残し置きて、使用の際上部の下端を挿入するやうなしおけば携帶に不便も感じない

次は三脚床几だが直徑七分長さ一尺六寸許の檜木三本を取り一方へ稍々細く削づる、而して西洋釘の太きを撰び二本を具へ、先づ該檜木二本を並行せしめ釘を挿すべき穴を穿ち、次にその一本と他の一本とを同様にし、穴と穴とは矩形より稍狭き角を保たしめ互に摩り交ふ程にす、かくて二本の釘を挿し三本密を接せしめて先端を狂げる、然る後力を用ひて三本の各端を三方に擴ぐると釘は拗れて開閉に適するやう宜い鹽梅になる、これで大體は出来た、僕はこの上端を苧繩にて連結し各邊より數個の綱目を作りこの上に三角尻布團を載せる趣向にしてゐる、かくて傘臺と共に布の袋に收畫囊の一面につけて歩くのであります

傘臺は僕のは竿の柄が曲つてゐるので、初め柄の入るほどの竹四尺許りを取り太き方を上端となし、その一側の上端より二寸切りかぎ柄を横より斂めるに適せしむる、而して稍々廻轉しつゝ下方に押し下げ得るやう切りかぎ更に今一回同様にする、尤も傘によつて異なるが、僕のは太くないから、この巾四分長さ五寸足らずにしてゐる、かく二回廻轉しつゝ押しさけおけば、大概の風には結構に堪ゆる茲に注意すべきは、上

*

*

*

*

*

*